



EPSON
EXCEED YOUR VISION

**2013年度（2014年3月期）
第4四半期 決算説明会**

2014年 4月30日
セイコーエプソン株式会社

©SEIKO EPSON CORPORATION 2014. All rights reserved.

■ 将来見通しに係わる記述についての注意事項

本説明資料に記載されている将来の業績に関する見通しは、公表時点で入手可能な情報に基づく将来の予測であり、潜在的なリスクや不確定要素を含んだものです。

そのため、実際の業績はさまざまな要素により、記載された見通しと大きく異なる結果となり得ることをご承知おきください。実際の業績に影響を与える要素としては、日本および海外の経済情勢、市場におけるエプソンの新商品・新サービスの開発・提供とそれらに対する需要の動向、価格競争を含む他社との競合、テクノロジーの変化、為替の変動などが含まれます。

なお、業績等に影響を与える要素は、これらに限定されるものではありません。

■ 本説明資料における表示方法

数値： 表示単位未満を切り捨て

比率： 千円単位で計算後、表示単位の一桁下位を四捨五入

2013年度通期決算
2014年度業績予想

2013年度
第4四半期決算

決算ハイライト（通期）



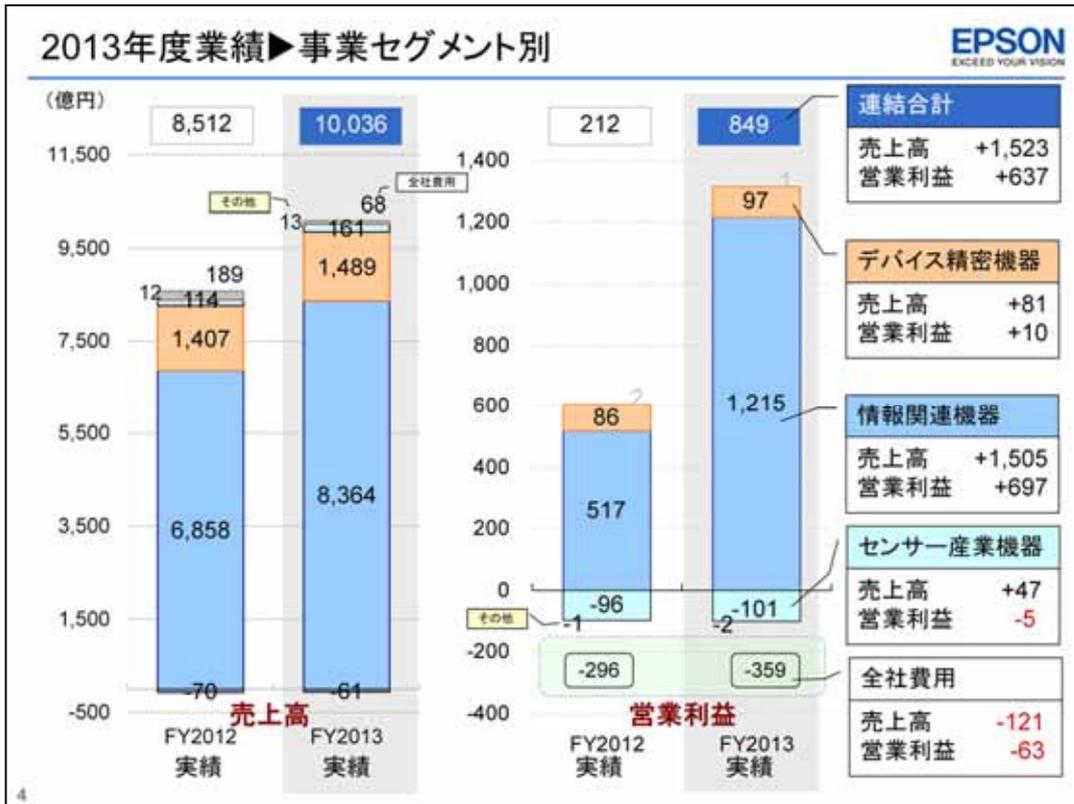
(億円)	2012年度		2013年度				増減額 / 増減率	
	実績	%	1/31予想	%	実績	%	前期実績比	前回予想比
売上高	8,512	-	9,900	-	10,036	-	+1,523 +17.9%	+136 +1.4%
営業利益	212	2.5%	790	8.0%	849	8.5%	+637 +299.8%	+59 +7.6%
経常利益	176	2.1%	740	7.5%	781	7.8%	+604 +343.1%	+41 +5.6%
税引前利益	△34	-0.4%	680	6.9%	719	7.2%	+753 -	+39 +5.8%
当期純利益	△100	-1.2%	520	5.3%	836	8.3%	+937 -	+316 +61.0%
EPS	△56.41 円		290.68 円		467.87 円			
換算 レート	USD	83.11円	100.00円		100.23円			
	EUR	107.14円	134.00円		134.37円			

前回予想 第4四半期の予想前提レート
USD: 100.00円, EUR: 140.00円

3

■ 2013年度通期決算ハイライト

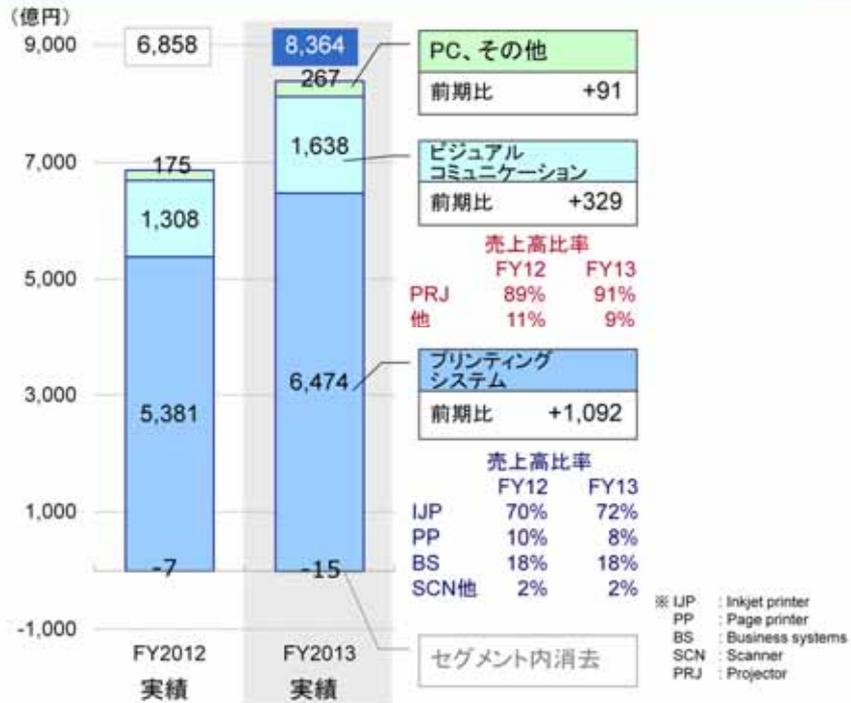
- 売上高は 前期比 1,523億円増収の 1兆36億円と、2008年度以来の1兆円を回復するとともに、営業利益は 637億円増益の 849億円と、大幅な増益を達成。
- また、これまで当社の業績に多大な影響を及ぼしてきた構造改革や訴訟関連などの諸課題について、おおよその目途がついたことにより、特別損失が大幅に減少した結果、税引前利益は753億円増益の719億円。
- さらに、当期純利益は、税引前利益の増益に加え、2013年度実績ならびに2014年度の業績見通しを踏まえ、繰延税金資産の計上が可能となったことから、税金費用が大幅に減少した結果、前期比 937億円増益の 836億円となり 過去最高益。
- 1月31日の前回予想との比較では、インクジェットプリンターなどにおいて、消費税増税前の消耗品特需の影響などがあり、会社合計で、売上高、ならびに各段階利益ともに、予想を上回った。



■ 2013年度事業セグメント別実績

- 情報関連機器は、
売上高 8,364億円、営業利益 1,215億円、
デバイス精密機器は
売上高 1,489億円、営業利益 97億円。
- 特に情報関連機器は、為替の円安効果があったとはいえ、
前期比で大幅な増収・増益となり、全社業績をけん引。
- 連結合計の円安による為替効果は、
売上高はプラス1,276億円、
営業利益はプラス422億円あったので、
それを上回る増収・増益を確保。

売上高比較(通期) ▶ 情報関連機器事業セグメント



■ 2013年度情報関連機器セグメント

売上高比較(通期) ▶ デバイス精密機器事業セグメント



■ 2013年度デバイス精密機器セグメント

円安の追い風はあったものの、SE15後期 新中期経営計画で定めた戦略への取り組み成果が着実に業績として表れてきた



インクジェットプリンター事業での取り組みと成果

プリントボリュームの多い顧客獲得に向けた商品力強化

大容量インクタンクモデルの販売数量拡大

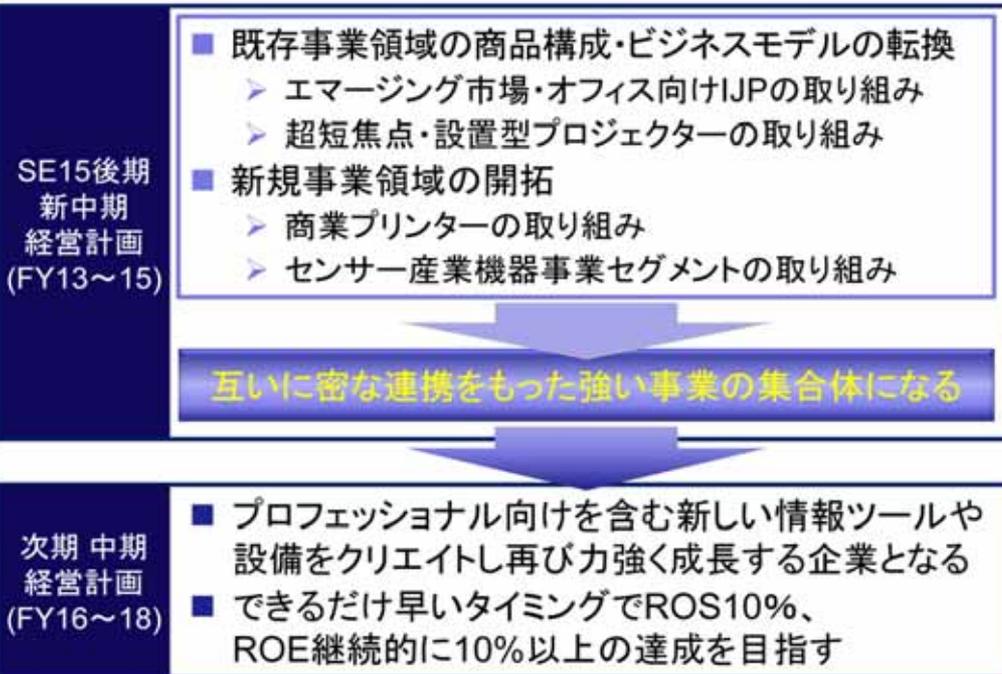
商業プリンターの商品ラインアップ拡大

本体モデルミックス改善

本体平均販売単価上昇

消耗品売上高トレンド上昇

2014年度の取り組み ①



■ 2014年度の取り組み

2014年度の
取り組み

SE15後期 新中期経営計画二年次として、
定めた戦略の方向感を変えることなく、
取り組みをぶれずに加速する

- ◆ 過度な売上高成長は追わず、着実に利益を創出し、
事業体質をより強固にする
- ◆ 固定費水準をコントロールしつつ、
将来成長に向けた施策を加速するために
必要な費用を戦略的に投入する



9

■ 2014年度の取り組み

2014年度 業績予想



(億円)	2013年度		2014年度		増減	
	通期実績	%	通期予想	%	増減額	増減率
売上高	10,036	-	10,100	-	+63	+0.6%
営業利益	849	8.5%	870	8.6%	+20	+2.4%
経常利益	781	7.8%	880	8.7%	+98	+12.6%
税引前利益	719	7.2%	840	8.3%	+120	+16.8%
当期純利益	836	8.3%	650	6.4%	-186	-22.3%
EPS	467.87円		363.35円			
換算 レート	USD	100.23円	100.00円			
	EUR	134.37円	135.00円			

10

■ 2014年度の業績予想

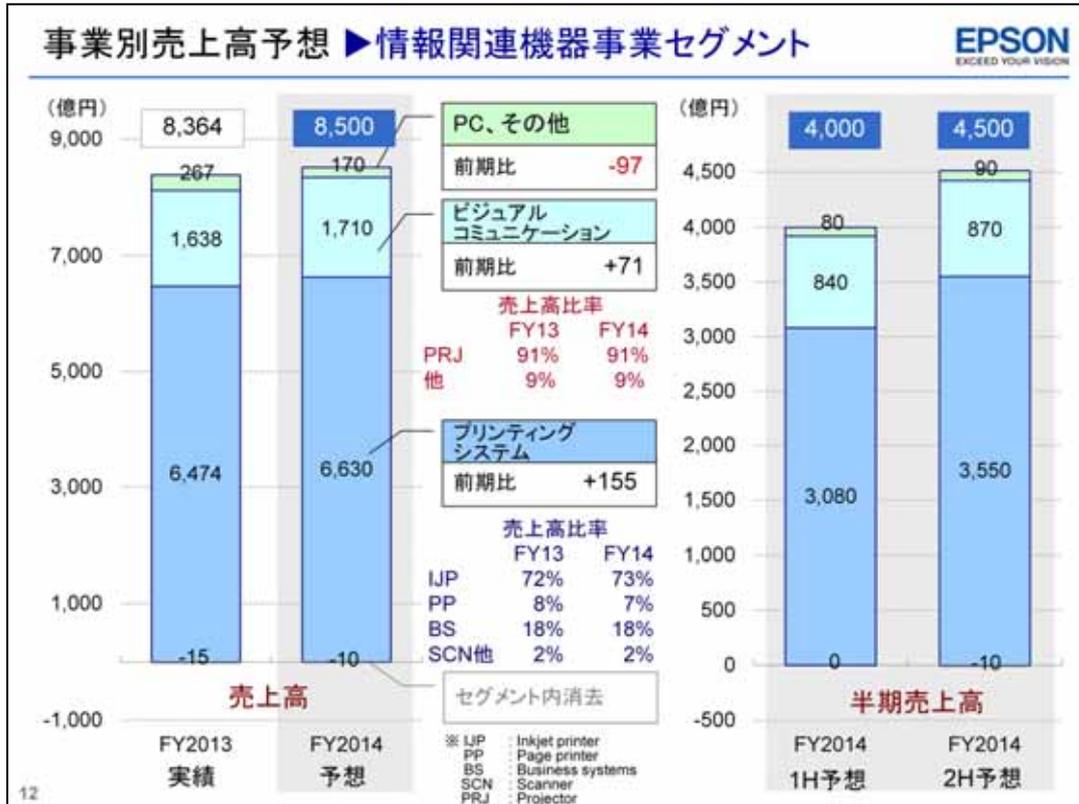
- 2014年度は、為替の前提レートをUSDは 100円、ユーロを 135円とした上で、売上高は、前期比 63億円増収の 1兆 100億円、営業利益は 20億円増益の 870億円、当期純利益は 650億円を予想。
- 当期純利益は 前期に比べ減益予想となるが、これは先ほど説明したとおり、2013年度において、繰延税金資産を計上したことにより、多額の税金費用の減少があったことによる。

2014年度業績予想(売上高)▶事業セグメント別



■ 2014年度事業セグメント別売上高予想

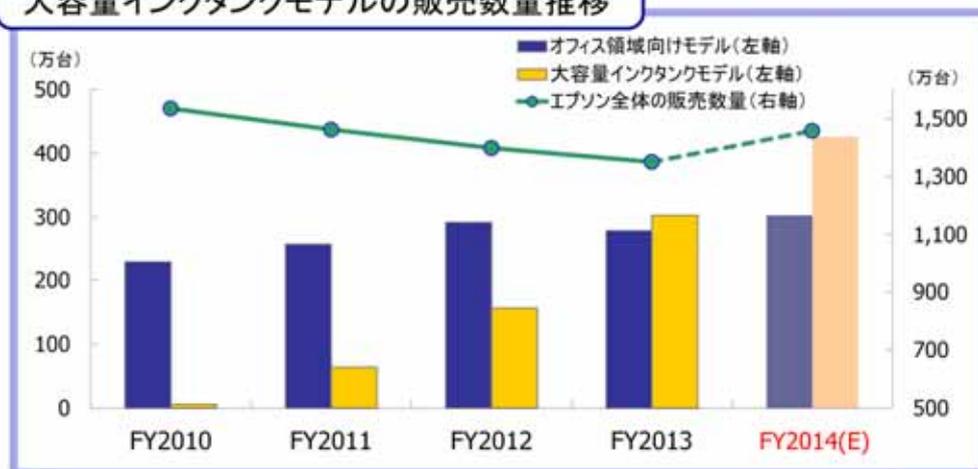
- 情報関連機器は、前期比 135億円増収の 8,500億円を、
- デバイス精密機器は、39億円減収の 1,450億円を、
- センサー産業機器は、28億円増収の 190億円を、
- それぞれ予想。



■ 2014年度情報関連機器セグメント

- 最初は、プリンティングシステム事業。
- インクジェットプリンター本体の市場は、2012年以降、当社を含めた主要プレーヤーによる低価格帯の絞り込みによる市場規模の縮小があったが、今後は、安定的に推移すると認識。
- 当社は、引き続き、戦略に基づいた施策を展開し、ホームプレミアム領域の商品の魅力向上、プレジジョンコア・ヘッド搭載モデルを中心にオフィス向けラインナップの拡充、大容量インクタンクモデルの数量拡大、商業プリンターのラインナップ拡充に取り組むことにより、本体数量を前年度比プラス 8%の前提として、増収を計画。
- 消耗品は、北米などでは本体のオフィス向け比率拡大効果が確認できているが、中期計画で掲げたとおり、本格的な伸びは来期以降と想定。加えて、2013年度末の消費税増税前特需の反動影響などもあり、消耗品売上高は前年並みを見込む。
- ビジネスシステムは、SIDMでは中国の徴税需要向けは安定的な推移を見込むものの、需要の減少が見込まれる他の地域では、製品力、コスト競争力で案件を確実に取り込むと同時に、POS関連製品では、インテリジェント化モデルや、ノンレシート分野などの開拓を進め、事業全体では前年並みの売上高を見込む。
- ビジュアルコミュニケーションは、プロジェクター市場はほぼ前年並みの数量規模で推移すると見込んでいるが、当社は、短焦点や高輝度分野など高付加価値商品を強化すると同時に、オフィス、教育、ホームの各市場に適した商品をご提供することにより、5%程度の数量成長を前提として、増収を計画。

オフィス領域向けモデルならびに
大容量インクタンクモデルの販売数量推移

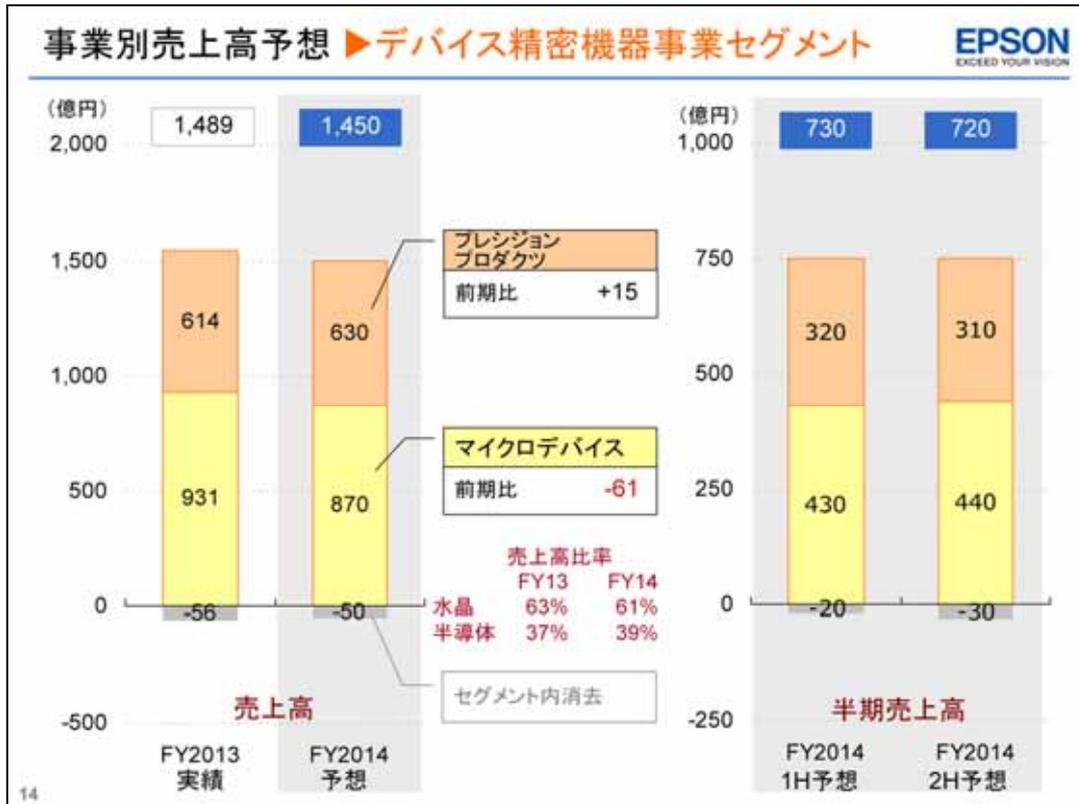


- 大容量インクタンクモデルを大幅に伸長
- オフィス領域向け商品ラインアップ拡充

13

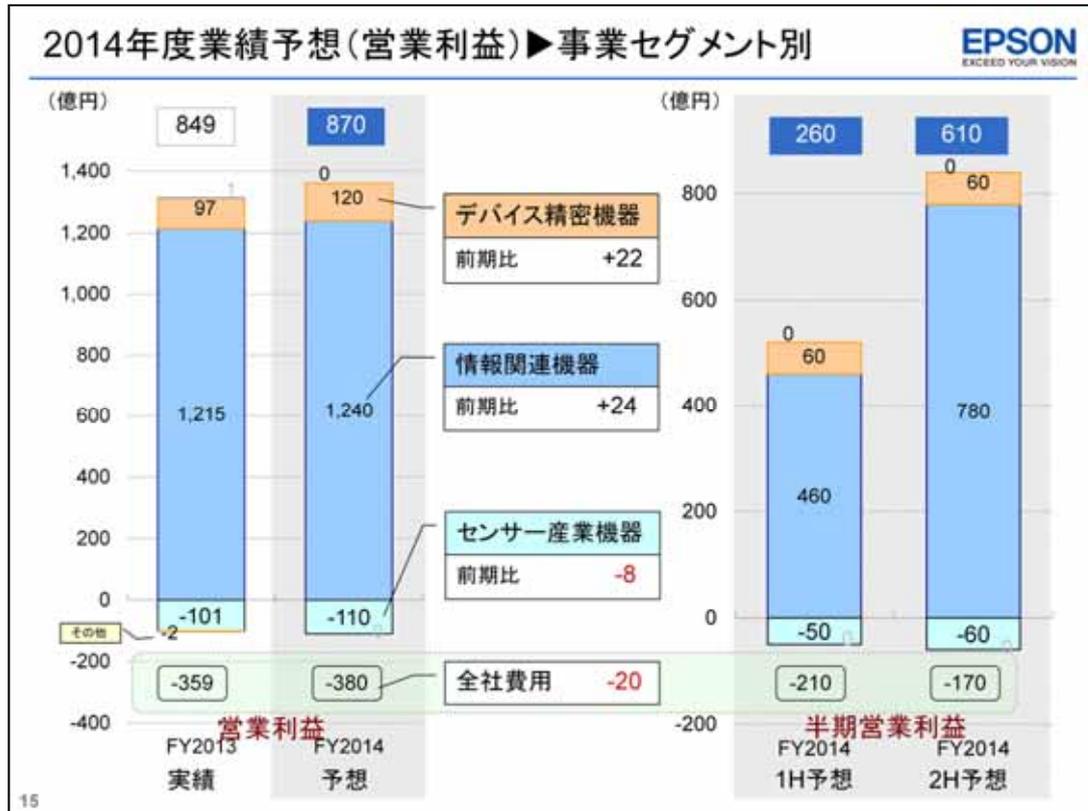
■ インクジェットプリンター事業の取り組みの進捗

- 大容量インクタンクモデルの数量は着実に増えてきており、2014年度では、エプソン全体の販売数量に占める比率も3割程度に達する見込み。
- 一方、オフィス向けモデルも、全体に占める比率は前年度と同じ2割程度だが、着実に数量を成長させる。オフィス領域は、エプソンにとってまだまだ開拓に時間をかけなければならない領域であり、中期的に成長させるためには、より一層の商品力強化とラインナップの拡充が必要。今年度は、その取り組みをしっかりと進める。



■ 2014年度デバイス精密機器セグメント

- マイクロデバイス事業は、
水晶では、基地局やネットワーク、車載向けなどの高付加価値製品の売上拡大による商品構成の転換が進んでいるが、主力のセルラーやデジタルカメラ、民生機器向け製品の単価下落の影響から、減収を見込む。
- プレジジョンプロダクツ事業は、
ウオッチにおいて、国内向け、高級品モデル、ならびにムーブメントビジネスの伸びにより、増収を見込む。



■ 2014年度事業セグメント別営業利益予想

- 情報関連機器は、前期比24億円の増益を予想。
- インクジェットプリンターは、
オフィス向け領域の開拓に向けた積極的な費用投入や、
消耗品の消費税増税前特需による反動減を織り込むものの、
大容量インクタンクモデルや商業プリンターの増収効果により、
インクジェットプリンター事業全体では増益を予想。
- ビジネスシステムは前年並みを、
ビジュアルコミュニケーションは増収による増益を予想。
- デバイス精密機器は、前期比 22億円の増益予想。
- マイクロデバイス事業は、
高付加価値製品への取り組みを加速させるとともに、
固定費、変動費の削減ならびに効率的な運用により、増益の見込み。
- ウォッチ事業は、増収による増益を予想。
- センサー産業機器は、新商品の投入により増収を確保しつつ、
エプソンならではの魅力ある商品の開発に向けた、費用投入を行う。

2012年度決算発表
2013年度業績予想

2013年度
第4四半期決算

決算ハイライト（第4四半期決算）



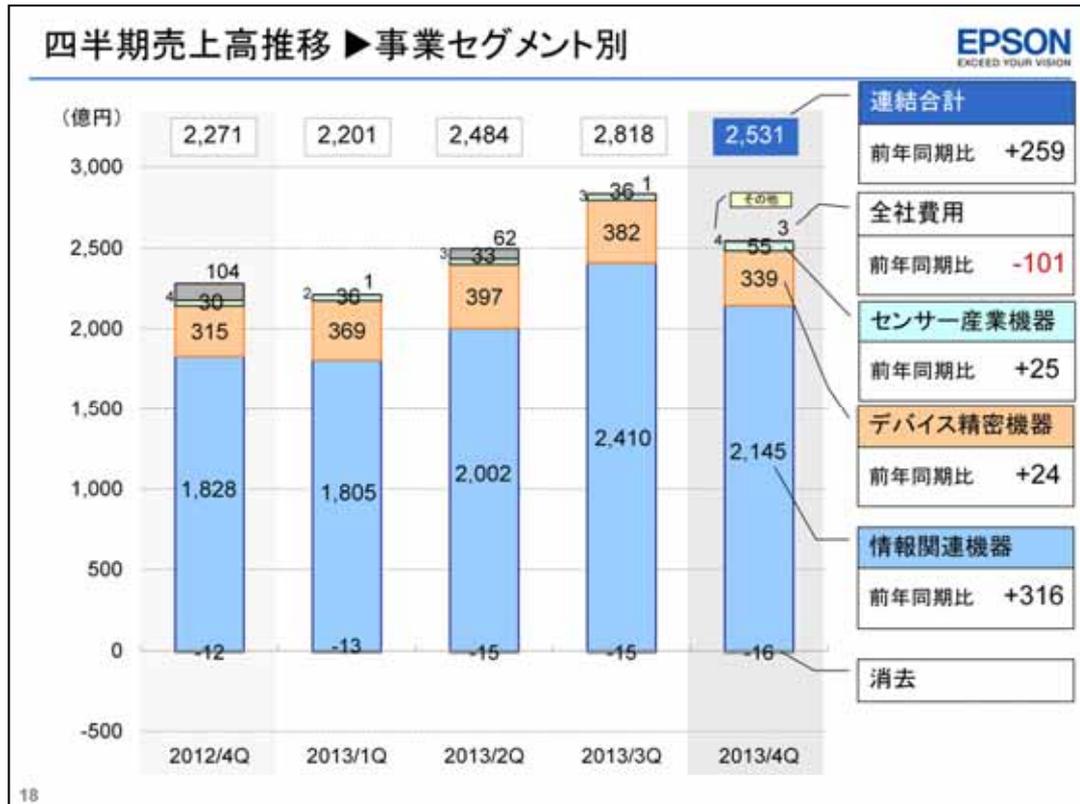
(億円)	2012年度		2013年度		増減	
	4Q実績	%	4Q実績	%	増減額	増減率
売上高	2,271	-	2,531	-	+259	+11.4%
営業利益	94	4.2%	100	4.0%	+5	+6.2%
経常利益	55	2.4%	61	2.4%	+6	+11.6%
税引前利益	△7	-0.3%	44	1.7%	+52	-
四半期純利益	25	1.1%	329	13.0%	+304	-
EPS	14.10円		184.08円			
換算 レート	USD	92.42円	102.78円			
	EUR	122.05円	140.79円			

前四半期 第4四半期の予想前換レート
USD: 100.00円, EUR: 140.00円

17

■ 2013年度第4四半期実績

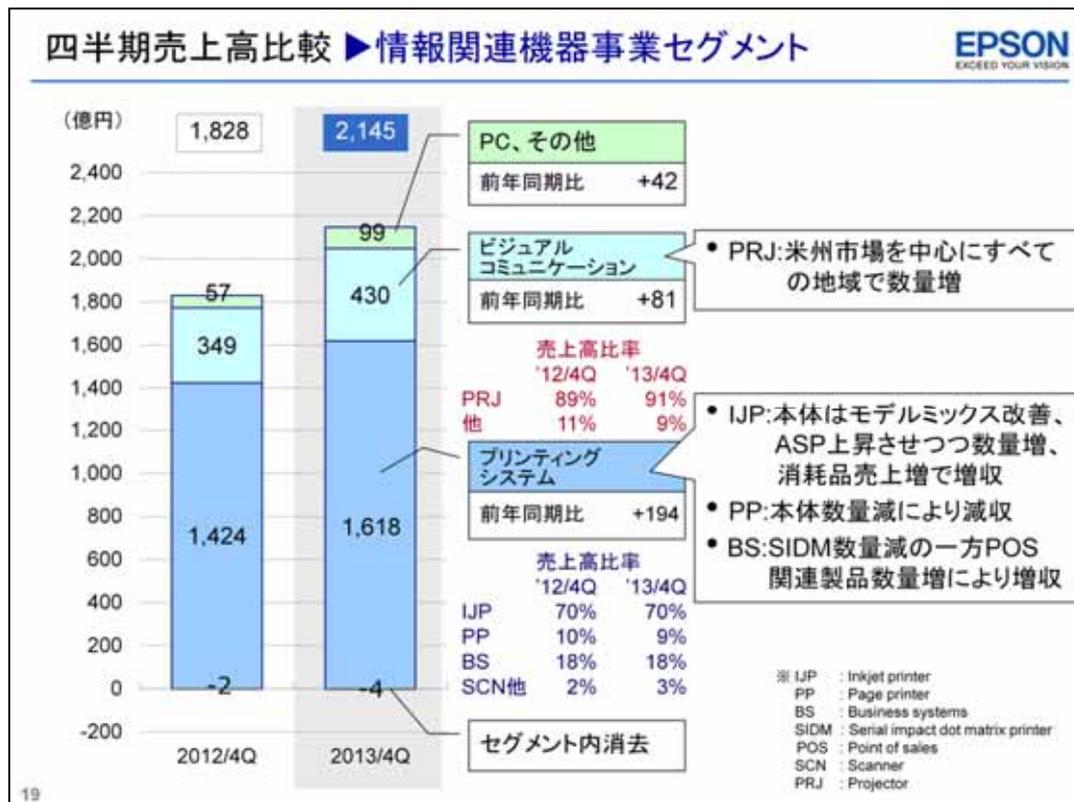
- 売上高は、前年同期比 259億円増収の 2,531億円、
営業利益は 前年並みの100億円、
四半期純利益は 304億円増益の 329億円。



■ 事業セグメント別の四半期売上高推移

- 全社費用セグメントは、一時的な特許料収入の計上などがあった前年同期に比べ、101億円減収となったが、情報関連機器セグメントが、316億円の増収、デバイス精密機器セグメントが、24億円の増収に加え、センサー産業機器セグメントがロボットなどが好調に推移し25億円の増収となったことにより、会社トータルでは、259億円の増収。
- なお、当四半期の売上高の為替影響は、情報関連機器セグメントを中心に、188億円のプラス影響。

四半期売上高比較 ▶ 情報関連機器事業セグメント

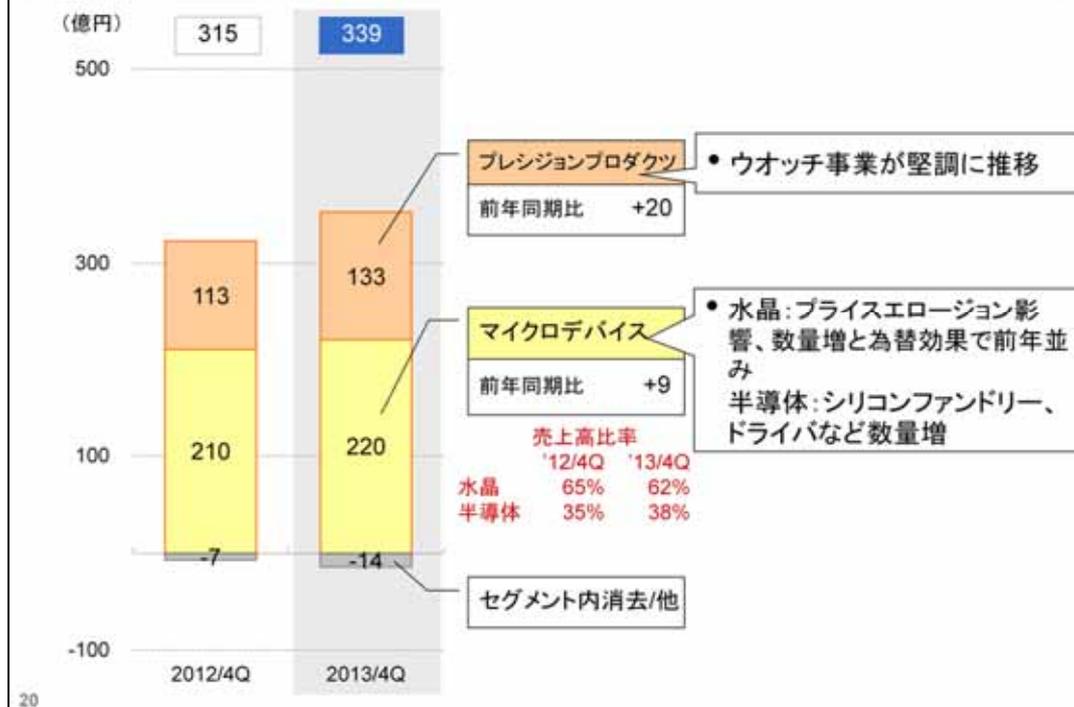


■ 情報関連機器事業セグメントの第4四半期売上高

- 当セグメントでは全ての事業において、円安による効果があった。
- プリンティングシステムは、194億円の増収。
- インクジェットプリンターは、本体がモデルミックス改善と平均販売単価を上昇させつつ数量増となったこと、ならびに消耗品の売上が増加したことにより、増収。
- 本体の地域別状況については、日本は競合の価格攻勢により数量減となったが、欧州新興国が数量減となる中、大容量インクタンクモデルは数量を伸ばすとともに、西欧ではオフィス向けを中心に数量増となったために、欧州全体では前年並みとなったことに加え、北米では数量増となったこと、さらに南米やアジアなどの新興国向けにも引き続き大容量インクタンクモデルの販売を大幅に伸ばした結果、前年同期比で8%の数量増となった。
- また、商業向けの大判プリンターにおいても、緩やかな景気回復などもあり、日本、欧州を中心に本体、消耗品売上が増加したことにより、増収。
- 以上の結果、インクジェットプリンター事業は、前年に対し増収。
- ページプリンターは、低価格モデルの数量の絞り込みにより、減収。
- ビジネスシステムは、SIDMが中国を除くアジアでは数量減となったものの、中国市場においては堅調に推移するとともに、POS関連製品は中国の飲食店市場の低迷が続く中、中国を除くアジアにおいて数量を伸ばしたことにより、増収。
- ビジュアルコミュニケーションは、プロジェクター市場がほぼ前年並みで推移する中、米州市場のビジネス向けを中心に、すべての地域で数量が増加したことにより、増収。
- 前回予想との比較について、
- インクジェットプリンターの売上高は、本体数量は若干未達だったものの、日本における消耗品の消費税増税前需要もあり、前回予想を上回った。
- ページプリンターならびに、ビジネスシステムは、ほぼ予想どおり。
- ビジュアルコミュニケーションは、プロジェクターが米州や日本を中心に前回予想を上回った。

四半期売上高比較 ▶ デバイス精密機器事業セグメント

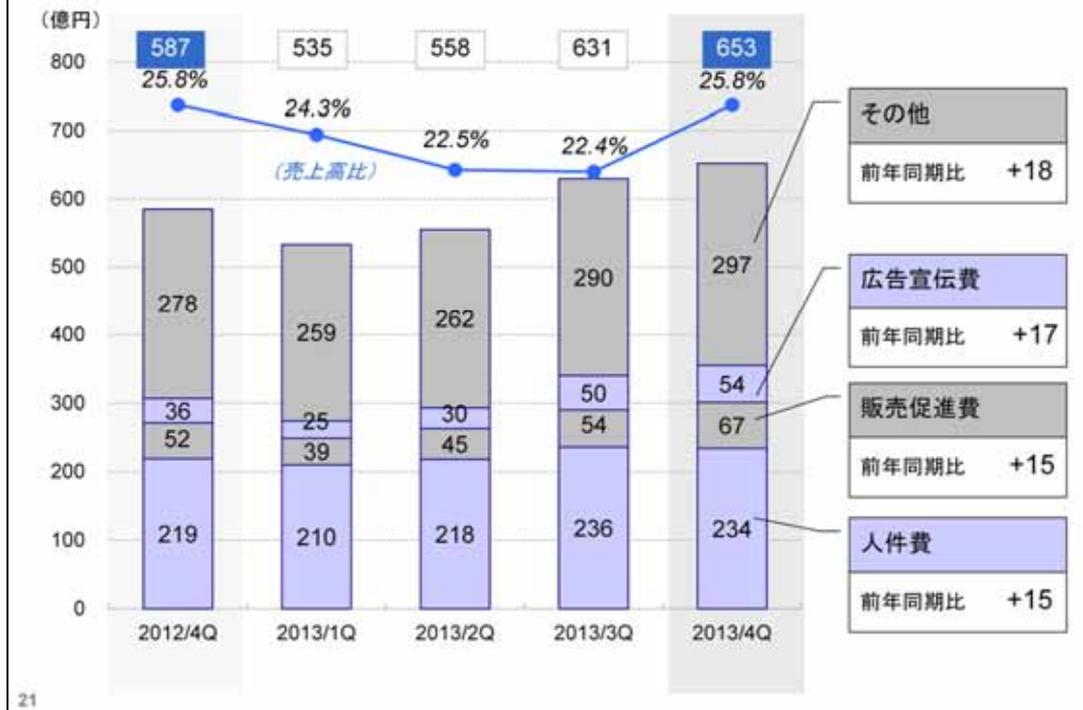
EPSON
EXCEED YOUR VISION



■ デバイス精密機器事業セグメントの第4四半期売上高

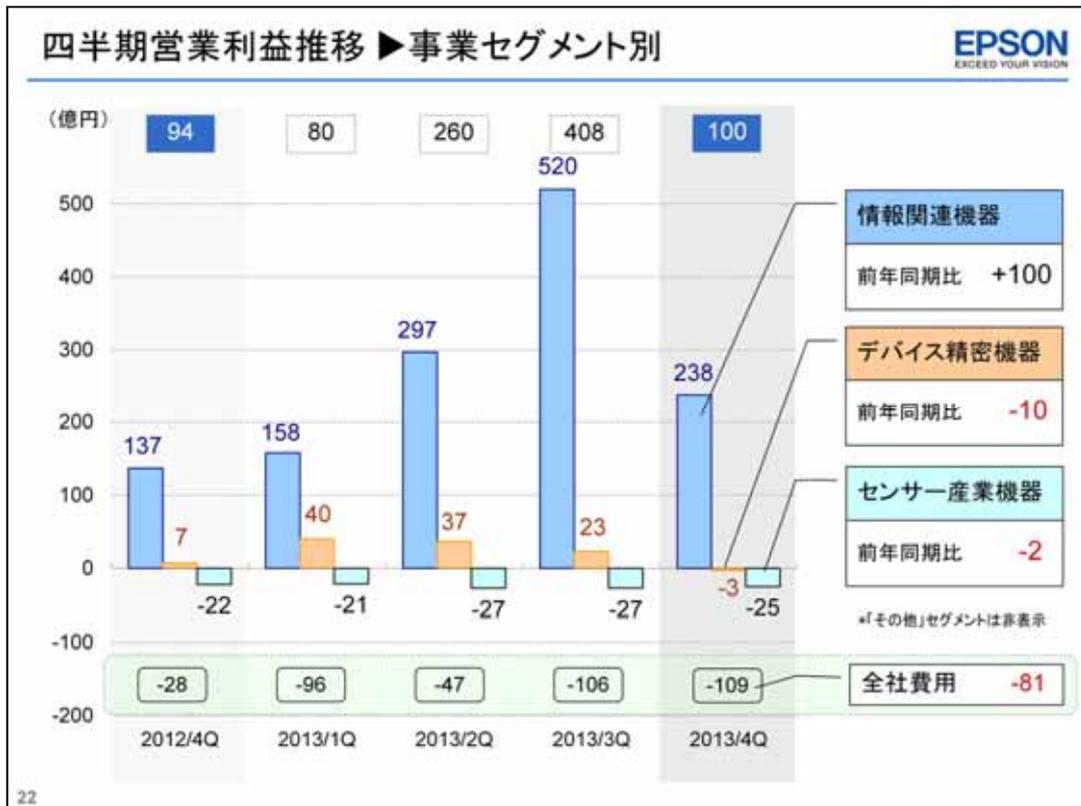
- マイクロデバイスは、水晶がプライスエロージョンの影響を受けたものの、数量増ならびに為替効果により前年並みとなったこと、また、半導体がシリコンファブリー、ドライバなどの数量増による増収となり、マイクロデバイス事業全体では増収。
- プレジジョンプロダクツは、ウオッチが国内向け高価格帯商品を中心に堅調に推移したことにより、増収。
- 前回予想との比較では、マイクロデバイスは予想通りだったものの、プレジジョンプロダクツは数量増により、前回予想を上回った。

四半期販売費及び一般管理費推移



■ 販売費及び一般管理費の四半期推移

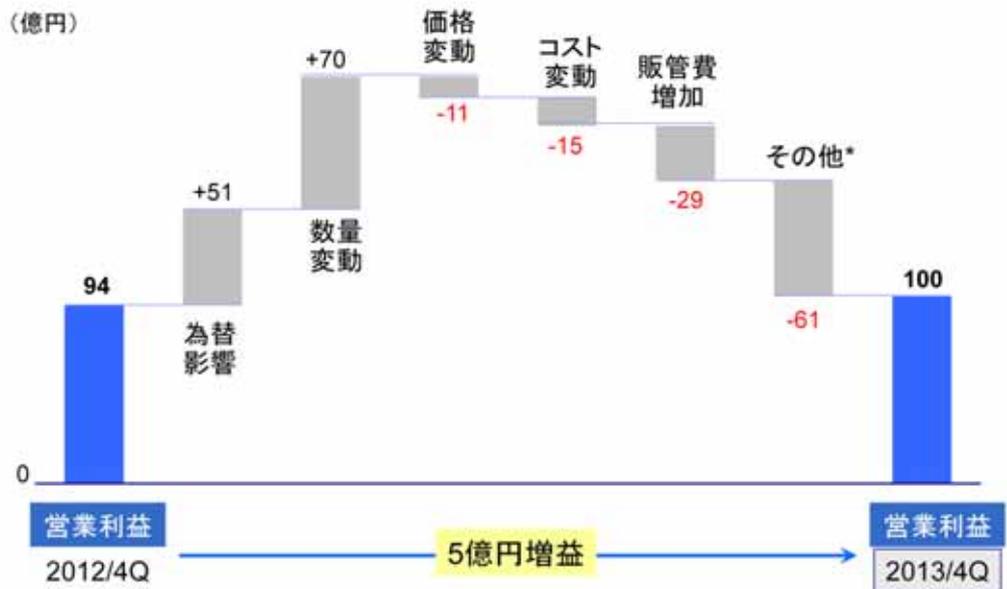
- 円安影響に加え、
情報関連機器を中心とした広告宣伝費や販売促進費の増加、
人件費の増加などがあったものの、
売上高に占める販管費の比率は、前年同期と同じ水準。



■ 事業セグメント別の四半期営業利益推移

- 当四半期における、為替の円安効果は、会社トータルで前年同期比 約51億円 のプラス影響。
- 情報関連機器は、前年同期比 100億円増益の 238億円。
- インクジェットプリンターは、消耗品の増収と、本体のモデルミックスならびに平均販売単価の改善に加え、商業プリンターの増収などにより、大幅な増益。
- ビジネスシステム、ならびにビジュアルコミュニケーションも、増収により増益。
- ページプリンターは、減収により減益。
- デバイス精密機器は、プレジジョンプロダクツはウオッチが前年並みとなったものの、マイクロデバイスの水晶におけるプライスエロージョンや、半導体のモデルミックス悪化により、減益。
- センサー産業機器は前年並み。
- なお、前回予想との比較では、デバイス精密はほぼ前回予想どおりだったものの、情報関連機器セグメントは、インクジェットプリンター、プロジェクターが予想を上回ったことにより、会社トータルでは、前回予想を上回った。

営業利益増減要因分析



*: 全社費用セグメント及び各セグメントにおいて類似商品同士の比較に適さない商品・事業の増減の総計

23

■ 営業利益の前年同期比の要因分解

- 2012年度 第4四半期の営業利益 94億円 に対し、販管費が増加したことに加え、今期は一時的な特許料収入が発生しなかったにもかかわらず、数量変動や為替影響の増益要因により、四半期営業利益は 100億円。

貸借対照表主要項目推移



24

■ 貸借対照表の主要科目

- 総資産は、手元資金や 受取手形及び売掛金、たな卸資産、
ならびに繰延税金資産の増加などにより、
前期末に比べ 873億円増加。
- なお、たな卸資産については、
為替の円安影響、ならびに売上規模の拡大により
前期末に比べ200億円増加の 1,836億円となったが、
在庫回転日数は前期末に比べ改善。

貸借対照表主要項目推移

有利子負債・有利子負債依存度



自己資本・自己資本比率



*有利子負債:リース負債を含む
*自己資本:純資産合計-少数株主持分

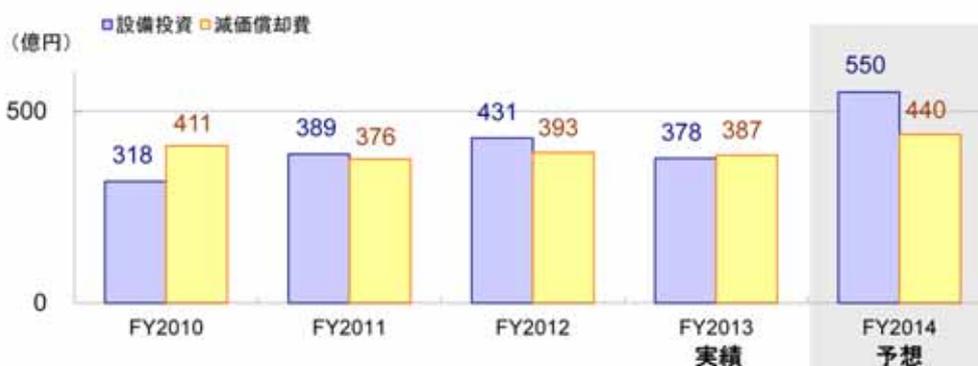
25

■ 貸借対照表の主要科目

- 有利子負債は、
社債の発行を9月に実施したが、
借入金の返済を進めたことにより 前期末に比べて510億円減少し、
総資産の有利子負債依存度は 25.5%となった。
ネット有利子負債は、92億円となり、前期末から778億円と大幅に減少。

- 自己資本は、
退職給付に関する会計基準適用による 109億円のマイナス影響があったものの、
当期の大幅な業績改善や、円安による為替換算の影響などにより、
前期末に比べ 925億円増加し、
その結果、自己資本比率は40.3%となった。

設備投資・減価償却費予想



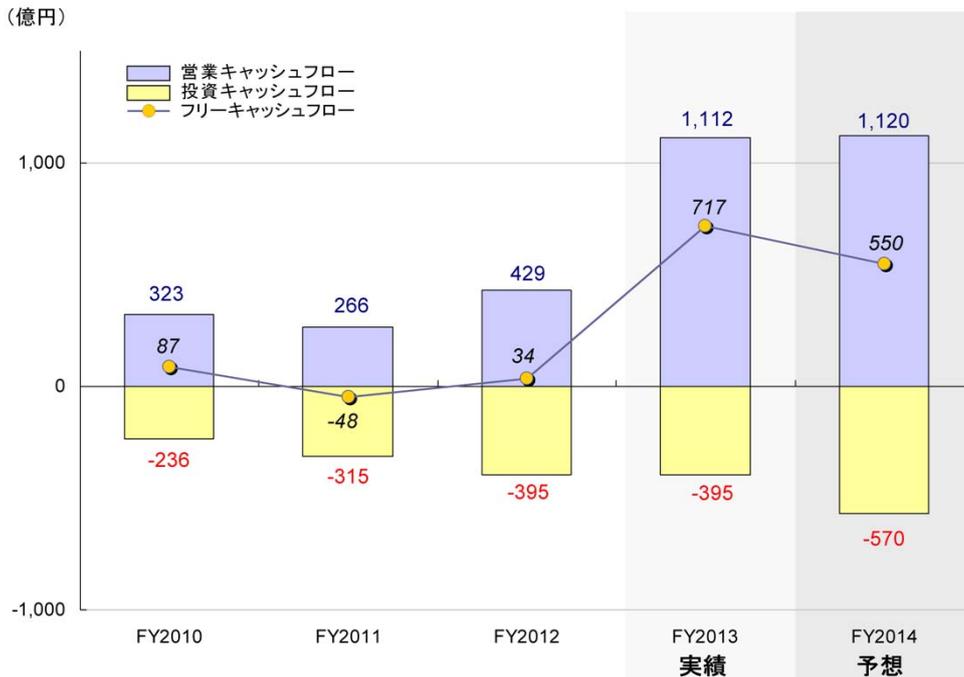
<セグメント別内訳>	FY2013実績		FY2014予想	
	設備投資	減価償却費	設備投資	減価償却費
情報関連機器	268	256	380	300
デバイス精密機器	80	78	100	80
センサー産業機器	8	7	20	10
その他・全社費用	20	45	50	50

26

■ 設備投資と減価償却費

- 2014年度の設備投資は、
インクジェットプリンターの製品競争力の強化に向けた
新しいプレジジョンコア・プリントヘッドの製造能力の増強など、
情報関連機器セグメントを中心に 550億円を計画。
- 減価償却費は 設備投資が増加することにもない、
440億円を計画。

フリーキャッシュフロー予想



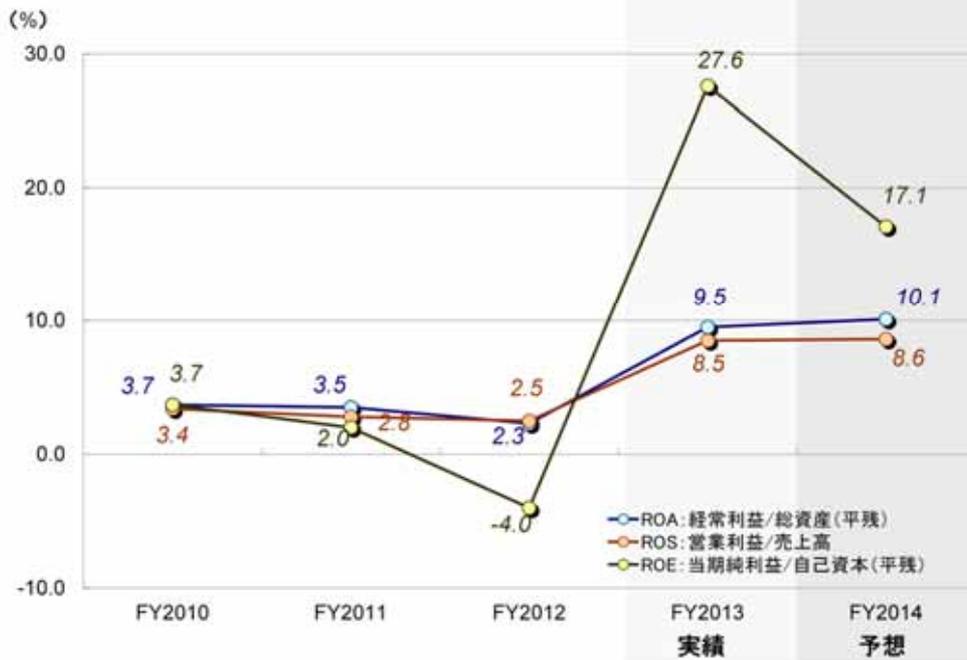
27

■ キャッシュフロー

- 2013年度のフリーキャッシュフローは前期比 682億円と大幅に増加し、プラスの717億円。
- 営業キャッシュフローは、大幅な収益改善により682億円増加の 1,112億円のプラス。
- 投資キャッシュフローは、前期と同じ水準の395億円の支出。

- 2014年度の営業キャッシュフローは 1,120億円、投資キャッシュフローは 570億円、フリーキャッシュフローは、550億円 を 見込む。

主な経営指標の推移



28

■ 主な経営指標は

- 2013年度は、繰延税金資産の計上に伴い、当期利益が一時的に増加したことから、ROEの水準が突出しているが、実態としては、2014年度と同水準と認識。

- 2014年度からIFRSを適用
- 第1四半期実績からIFRSによる業績開示

日本基準		2014年度		IFRS基準		2014年度	
		通期予想	%	通期予想	%		
売上高		10,100	-	売上収益		10,100	-
営業利益		870	8.6%	事業利益 ※		850	8.4%
経常利益		880	8.7%	営業利益		1,040	10.3%
税引前利益		840	8.3%	税引前利益		1,030	10.2%
当期純利益		650	6.4%	当期純利益		800	7.9%
EPS		363.35円		EPS		447.20円	
換算	USD	100.00円		換算	USD	100.00円	
レート	EUR	135.00円		レート	EUR	135.00円	

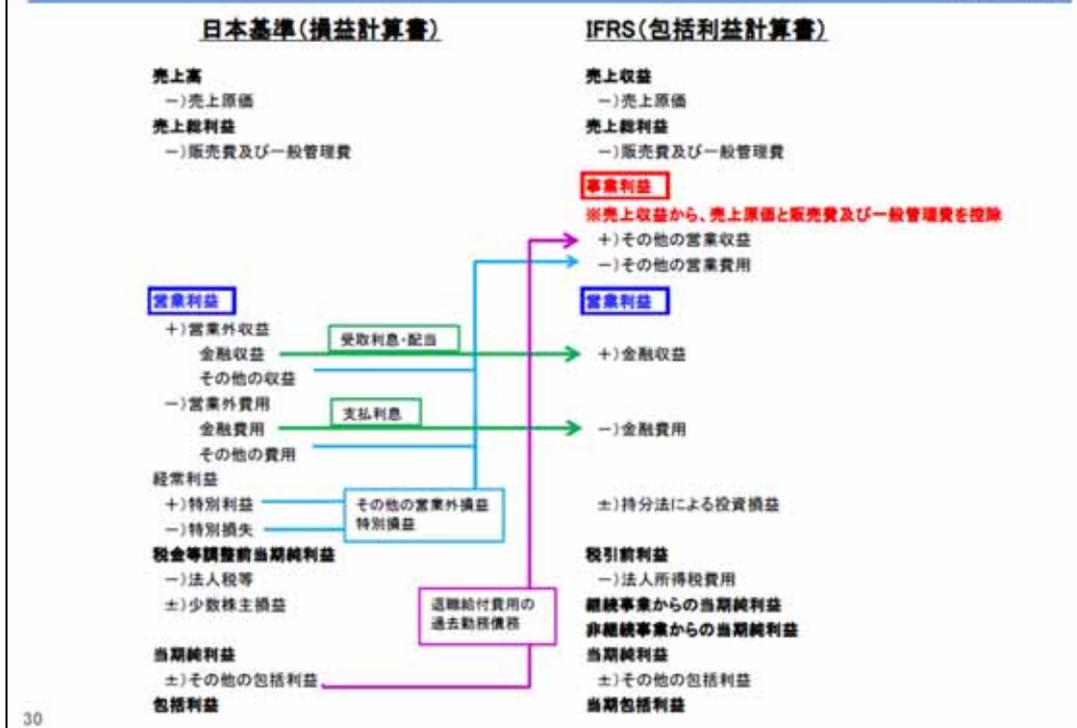
※「事業利益」は、(売上収益 - 売上原価 - 販売費及び一般管理費)にて算出する利益であり、連結包括利益計算書上に定義されていない指標であるものの、日本基準の営業利益とほぼ同じ概念であることから、連結財務諸表の利用者がエプソンの業績を評価する上でも有用な情報であると判断し、追加的に開示しております。

29

■ IFRSの導入

- リリースにもあるように、当社は2014年度からIFRSを適用。
- これは、グループ会社・各事業に対して統一された仕組みや情報に基づくマネジメントを行い、「真のグローバル企業」としての経営基盤の強化を図ることを目的とするもの。
- また、今回の適用にあたり、今後も継続的に、事業の状況や環境をご理解いただくために、従来の日本基準の「営業利益」に近い概念となる、「事業利益」という独自の指標を用い、追加的に開示を行う。
- なお、上記のIFRSの「営業利益」が「事業利益」を190億円上まわっているが、これはおもに当社の年金制度改定による影響。
- IFRS基準の2013年度実績については、第1四半期の説明会において開示を予定。

IFRS適用にともなう損益計算書の表示変更



■ 日本基準からIFRS基準への損益計算書の組み換えイメージ

EPSON
EXCEED YOUR VISION